

火を体験する

焚き火の魅力

道端や川原で火を焚いていると、なぜか人が寄ってくる。ひとこと二こと言葉を交わしては、手をあぶり、あるいは火のそばにしやがみ込んで、遠い日を懐かしむようにじつと火を見つめる。

ゆらめき変幻する炎。かすかに甘い煙の匂い……。火には人の六感を満たしてさまざまなイメージを喚起し、時には妖しい幻覚をも呼び起こす不思議な作用がある。パチパチと木がはぜる音を聞いていると、やがて時間感覚も麻痺して、妙にゆつたりとひそやかに安息したり、逆に言い知れぬ興奮を覚え、いつになく冗舌になつたりもする。火は、人間のDNAに刻まれた根

源的な記憶を呼び覚ます触媒であり、神々や祖霊の世界へといざなう最古のマルチメディアだ。

いま目の前で燃える火は、アフリカの谷で猿人や原人たちが見つめた火とも、五千年前に縄文人が見つめた火とも、基本的に変わることはない同じ火だ。同時に、この瞬間に燃え盛る火は数秒前の火とも違うし、一瞬後の火ともまた違う。古代の神話・伝説や音楽の多くも、火のそばで生まれた。火は実に、人類文化の原点であった。

火を使えない学生たち

いま、大学生の多くは、ナイフで木や竹を満足に削れないし、マッチで火をつけられない者も増えてい

関根 秀樹

Written by
Hideki Sekine

る。焚き火でご飯を炊こうにも、かまどを組むことに思い至らず、不安定な焚き火の上に直接飯ごうや鍋を置こうとしたり、太い薪を割りもせず、そのまま百円ライターで点火しようとする学生もいる。「先生、火が着かないんですけど……」。焚きつけというものを知らないのだ。

薪は重油をかけて着火するも

のと信じている小中学校の教員もまれではない。驚いたことに、宗教的な意味合いを持つ民俗行事のどんど焼きでさえ、重油をぶっかけて火をつけるような自治体が現れた。どす黒い煙と嫌な臭い。火を使う能力の低下は、あきらかに感性の低下をももたらしている。

戦前までの日本では、都市の一部を除けば、調理や暖房に用いるエネルギーの大半を薪や木炭、練炭など植物由来の燃料でまかなっていた。そんな時代なら、風呂焚きや飯炊きで親兄弟の作業を眺め、手伝う中で、マッチの使い方や薪を割る斧や鉈の扱い方を一つ一つ試行錯誤しながら覚える機会もあった。だが、農村ですら囲炉裏も電も珍しくなり、電子レンジなど電磁調理器の普及で、ガスレンジの炎さえ見たことのない子どもも増えている。タバコを吸う家族がいなければ、生の火を見る機会は年に一、二度、誕生日かクリスマスケーキのロウソクの火くらいのもの。かつて家の中心にあった火の存在感はすっかり薄れてしまった。

火の扱いにはさまざまなコツがある。こうした技術文化の継承には、日頃から見るとはなしに目にする環境や、ある程度の時間と経

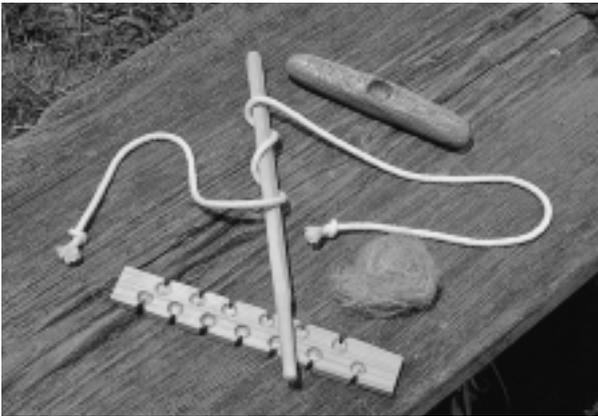
験が必要だ。「落ち葉焚き」すら見たことがない若者たちの焚き火がデタラメなのは、考えてみれば当然だ。七〇年代なら小中学校の校庭や裏庭でも焚き火の体験学習くらいできたものだが、今は管理責任や近隣からの苦情で何もできないところが多い。東京都渋谷区の教育委員会が筆者を講師に焚き火の体験講座を開いてみたら、渋谷区内にはまともに焚き火ができる場所が「一カ所もなかった」というウソのような話もある。もっとも、「ムク切れの「体験学習」にどれほどの効果があるかは疑問だが。

焚き火のできる公園を作る

いま、都市近郊で焚き火ができるのは、よほど恵まれた私有地が川原や浜辺、それにキャンプ場くらいだろう。ところが最近では、利用者のあまりのマナーの悪さに、焚き火を禁止するキャンプ場も増えた。生ごみからビニール、プラスチック容器、アルミホイルや空きビンまで中途半端に火に放り込んで、汚い焼け跡だらけにされたんじゃない。しかし、ただ禁止禁止では技



ヒモギリ式発火道具で火を起こす



たけやま森の学校(福島県平田村)の火起こしセット

術の向上もなく、かえってマナーは悪くなるばかり。むしろ、安全でカッコイイ焚き火の技術と、知的で深遠な火の文化をきちんと伝える努力が必要なのではないだろうか。

本質を見失ったダイオキシソシン規制法の流れで、都市の環境保全に一役買っていた神社、寺院の落ち葉焚きができなくなっていました。今は剪定された枝も落ち葉も、廃棄物(粗大ゴミ)としてお金をかけて処分しなければならぬ。このままでは

貴重な都市の緑地が、人手や管理費の不足から荒れ果て、近い将来には消えてしまったらう。

街路樹や公園の樹木も含め、開発や管理のために伐採され、剪定される枝や落ち葉や下草は、日本全国で毎年数千万トン。これも廃棄物として莫大な税金をかけて処理されるわけだが、搬出費の不足で伐採されたまま野山に放置される樹木を入れれば、その量は軽く一億トンを超える。日本中の調理と暖房にかかるエネルギーの全てをまかなってあまりある膨大な量である。

日本の公園は「公園法」という法律で、焚き火も穴掘りも木登りも禁止。まるで「遊ぶな」と言っているようなものだが、地域住民と行政とが話し合って焚き火も穴掘りもできるようにした公園もある。東京では世田谷の羽根木公園、レイパークや大田区の千鳥町にある草っぱら公園、私有地の山林を借りて民間で運営されている町田市のだぬき山冒険遊び場などが有名だ。もちろん、「こういふのがどこにでもできるわけではない。防災上、ある程度の広さが必要だし、近隣からの煙の苦情を考えれば、火を焚く曜日や時間帯も決め

焚き火の基本

たほうがいいだろう。プラスチックなど有害物質や臭い煙を出す葉や枝は燃やさないなどのルールやマナーも守りたい。公園の一角に焚き火コナーやカマドがあれば、落ち葉の処理や剪定も業者任せでなく、住民の楽しみとしてできるし、町内の行事や災害時の炊き出しにも便利だ。火の技術文化を伝承することが、地域の教育力を回復し、自然と人間との「ミニ」ティー再生にもつながっていく。神社や寺、学校などにもこういう仕組みを広げて行けばいい。

かつて身近な里山は、農家が日常的に焚き木を拾い、炭を焼き、家畜の工サにもなる下草を刈り、堆肥にすき込む落ち葉を集め、保全管理してきた。山や森は人間が利用することによって適度な圧力がかかり、結果としてバランスのとれた雑木林の生態系が維持されてきた。いま、山や森と人間との関係は希薄になり、人の入らない山はどこも荒れ果てている。定期的に手を入れ、落ち葉や枝を燃やせば、森は明るく開放的になり、多様な生物が共存できる。環境に配慮した適正な焚き火は森の掃除であり、なくてはならない環境保全技術なのだ。

焚き火には手順がある。いきなり太い薪に火はつかない。小さな種火で枯れたスギの葉やカバの樹皮のような焚きつけに点火し、ごく細い枝の束に火を移す。それが燃え上がる場所に小指の太さの枝の束をのせ、徐々により太い柴に火を移していく。そうして少しずつ大きく育てた火の熱エネルギーが、やがて太い薪を発火点まで温め、着火するわけである。薪に火が移る前に、もう少しということこで立ち消えてしまうことも多いから、よく乾燥した焚きつけをたっぷり用意することが重要だ。雨の後などで湿った枝しかないようなら、クシャクシャに揉みしだいて樹皮に亀裂を入れたり、鉋やナイフで切れ込みを入れたり、とにかく樹皮を剥がして表面積を大きくすると火つきがよくなる。

良いたき木の条件は、適度に乾燥していること。よく燃えて火力が強いこと。ススや煙を多く出さないこと。どんな樹種でも1kgあたりの燃焼効率はほぼ同じ。木の種類によって燃え方が違うのは、

樹皮の厚さや材の密度、含水率、含まれる樹脂の成分と量が異なるからである。基本的には軽い木ほど火つきはよく、重い木ほど火力が強く火保ちがする。スギやマツなどの針葉樹は薪割りが楽で着火性も良く、派手な炎を上げてよく燃える。ただし、煙とススが多く、直火料理に使うとヤニ臭くなるし、火保ちは悪い。これに対してナラやクヌギ、カシのような堅い広

葉樹の薪は、火つきは悪いがあまり炎を上げずススも出さず、『オキ』になって遠赤外線を発しながらゆつくりと安定して燃える。そうした樹木の燃焼特性を活かし、焚き始めは針葉樹、炎が安定したら広葉樹の堅い薪というぐあいを使い分けるのが理想だろう。湿気った薪は鉋で細かく割り、樹皮を剥がし、鉋目や削りかけを作つてやれば乾燥も速く、火つきがよくなる。



鍛冶屋の火(福島県いわき市上遠野、長谷川昭三鍛冶)

古代発火法で遊ぶ

マッチやライターを使わないで火を起こす工夫も楽しい。木と木を摩擦して火を起こす古代の火起こしは、岩城正夫(和光大学名誉教授)の実践的研究で、いまや全国的に普及している。古代発火法検定協会では指導者養成の講座や検定を定期的に行なっているし、筆者自身も各地の博物館や学校で指導に当たってきた。ウツギの細長い棒を板のくぼみに立て、両手で錐をもむように回転摩擦する、キリモミ式発火法¹⁾は、一見原始的なようだが、火種ができるまで一分もかからない。筆者の最高記録は六秒。炎が上がり、焚きつけに点火するまでが二〇秒ほどである。

式火起こしセット(ヒモギリ式)²⁾を開発・販売している。教材メーカーや他の地方で販売する道具にはなかなか火が起きないものも多いが、平田村のセットはとてもしやすい。この村では、移築した茅葺きの古民家で毎日のように囲炉裏に火が焚かれ、毎週さまざまな体験学習が行なわれている。

三内丸山遺跡や福島県文化財センター白河館(まほろん)などの火起こし体験コーナーで使われているマイギリ式発火具は残念ながら三セモノで、古代にはなかった。これは江戸時代の後半、伊勢ソロバンなどの職人が使う工具・舞い錐(ボンドリル)をもとに伊勢神宮で儀式用に創製したもの。各地に普及したのは戦時中の紀元二千六百年記念

式典がきっかけだ。さすがに伊勢神宮では二百年続いた儀式をいまさら変えるわけにはいくまいが、博物館でウソを教えるのはやはり



ファイアーアート「火の祝祭」(1993)より

問題がある。

火起こしや焚き火は楽しい。焚き火禁止の逆風の中、料理をしたり炭や土器を焼いたり、鍛冶のまねことをしたり、火で遊びながら環境保全を考える試みも各地で広まりつつある。火は人間の暮らしの原点であり、科学技術や芸術文化の基本でもある。この文化遺産を、我々の世代で絶やしてはならない。

CEL

関根 秀樹(せきね・ひでき)

和光大学や桑沢デザイン研究所などの非常勤講師も務めるフリーの研究家・ライター。一九六〇年福島県生まれ。道具と技術の文化史や民族音楽、民族美術、環境教育などレパートリーは広い。国際火遊び学会顧問。キリモミ式古代火起こしで六秒の世界記録を持つ。各地の美術館や博物館で理系・文系・芸術系の枠を超えた多彩なワークショップを展開。著書は、『縄文生活図鑑』、『新版民族楽器をつくる』(いずれも創和出版)、『焚き火大全』(共著、創森社)など。